



くらしき協力隊通信

高梁川流域
CROSSING

2022.8 Vol.4

【珈琲を淹れて50年】

倉敷市真備町には、ご夫婦で40年以上に渡り、こだわりの珈琲を提供するジャズ喫茶「コーヒーハウスごじとま」があります。平成30年7月豪雨災害から4年が過ぎ、当時の状況を振り返り、「ごじとま」の再出発への軌跡と珈琲への熱い想いを紹介します。



現在の外観



マスターの高本さん

【珈琲との出会い】

1971年11月3日（文化の日）、当時、学生だったマスターの高本さんが、特徴的な円形カウンターで有名な京都の「イノダコーヒ三条支店」で飲んだ一杯の珈琲にカルチャーショックを受けたことに「ごじとま」のルーツがあります。

18歳の時に観た、黒澤明監督の「生きる」という映画に感銘を受け、誰かの何かの役に立つ生き方をしたいと、京都の老舗喫茶店「築地」で約10年間修行をし、1980年5月に真備町では初？当時は全国でも珍しいジャズ喫茶「ごじとま」が産声をあげました。

【39年目の絶望】

平成30年7月豪雨災害で、真備町は水害の被害を受けました。「ごじとま」も被災し、店舗兼住居が5m30cmまで水没しました。水が完全に引いて、現地を確認したときは、絶望感で声が出ませんでした。敷地には、土砂など様々な物が流れ着き、ドアは開かず、梯子を使って二階の窓から中に入りました。お店の中にあった真空管アンプ、手造りスピーカー、レコード、山積みの本など、39年をかけて積み上げてきた歴史（空間）は、見るも無残な状況となっていました。さらに、追い打ちをかけるように、親しくしていた近所の方の訃報にご夫婦は、悔しく切なくて泣き崩れました。

当時の状況について、奥様は「地獄絵図を見ているようだった……」と振り返りました。



被災当時の店内

【自分のことよりも誰かのために】

当初は、お店の復興は後回しにして、ボランティアを振り分け・指導し、メディア対応などを行いました。特に「メディア対応」は、どんなに忙しくても、また、どんなに答え辛い内容であっても対応しました。「真備町のこと、水害のことを風化させてはいけない。」という想いで、未曾有の災害がもたらした真備の凄惨な状況を全国に発信しました。その影響もあってか、「ごじとま」の被災を知り、全国のジャズ仲間からレコー

